

天、不時之然

後一記憶上為又兴害了起又有り

**退跡と記録にみる災害と防災** 



先人たちは、将来の災害被害が少しでも軽く済むようにとの願いを込め、「後ノ記憶ト為ス」として、その詳細を記録し後世に残してきました。また、遺跡の発掘を行う中で、古代の災害の痕跡がみつかることがあり、これらは文字記録がない時代の災害状況が判明する貴重な記録です。

昭和28年9月25日の台風第13号により、四條畷市内で甚大な被害があってから今年でちょうど70年が経ちました。また、大正12年の関東大震災から100年でもあります。この節目の年に、災害と防災について考えます。

多くの皆さまにご協力いただき特別展を開催することができました。厚くお礼を申し上げます。

#### お世話になった方々(敬称略)

大阪府教育委員会、大阪府立四條畷高等学校、大阪歴史博物館、 交野市教育委員会、門真市立歴史資料館、国土交通省淀川河川事 務所淀川資料館、四條畷市立図書館、高槻市立今城塚古代歴史館。

淺井達也、石田榮市、今西康弘、内田真雄、小松千絵、寒川旭、 須山朋子、竹原伸次、常松隆嗣、橋本昭彦、福永信雄、

三好裕太郎、村松直美、森佳之、森田文子、山口節、吉田知史。

題字:山口米太郎(『浸水日誌』より)

イラスト:佐野喜美

会 期:令和5年10月3日(火)~12月10日(日)

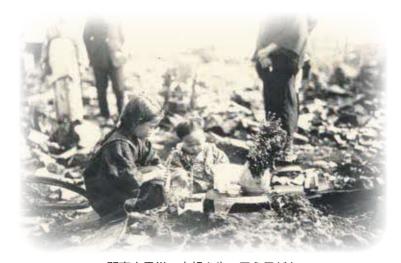
発 行 日:令和5(2023)年10月3日

編集・発行:四條畷市教育委員会・四條畷市立歴史民俗資料館

会 場:四條畷市立歴史民俗資料館

(指定管理者:株式会社地域文化財研究所)

皿之作は、實成自奈,田由季甲



### 関東大震災で肉親を失い弔う子ども 大正12年9月 四條畷市教育委員会蔵

# 目次

1	. 災害を	記録	する	)																										
	大洪水を	記録	した	· []	浸才	日	誌		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	4
	災害を後	世に	伝え	る		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	5
2	<ul><li>残され</li></ul>	た地	震の	記	録																									
	日本の地	震と	地震	<i></i>	種類	Į•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	6
	四條畷で	みつ	かっ	たi	南海	地	震	の	痕	跡	(	雁	屋	遺	跡	)	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	8
	四條畷と	生駒	断層	()	城遺	跡	(	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	10
	慶長伏見	地震	の痕	]]	1	(西	Ξ	荘	遺	跡	)	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	12
	慶長伏見	地震	の痕	]]	2	(有	池	遺	跡	)	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	14
	慶長伏見	地震	の痕	]]	3	(今	城	塚	古	墳	)	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	15
	100年前6	の大災	害	・関	東	大語	夏ジ	<b>{</b> {	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	16
	阪神・淡	路大	震災				•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	17
3	. 記録さ	れた	水害	}	洪才	<																								
	古墳時代	の水	害・	讃.	良君	<b>『条</b>	里	遺	跡	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	18
	江戸時代	の豪	雨災	害			•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	20
	明治18年	淀川	洪水			•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	22
4	. 写真記	録で	みる	台	虱被	害																								
	室戸台風			•		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	24
	新発見の	室戸	台風	(災 <del>)</del>	害写	滇	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	26
	昭和28年	台風	第13	3号		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	28
5	. 現代の	災害	と防	災																										
	防災マッ	プレ	田代	<u>`</u>	(())	ᡓ.																								21

# 1. 災害を記録する 『浸水日誌』明治18年(1885)

# ■大洪水を記録した『浸水日誌』



山口米太郎さん 20歳のころ 明治17年撮影 個人提供



『浸水日誌』標題紙 山口米太郎著 明治 18 年

明治18年(1885)、6月から7月にかけての大雨で2度にわたり淀川が決壊し、河内平野一帯を大洪水が襲いました(22分参照)。この洪水に臨んで、その記録を詳細に残したのが山口米太郎さんです。山口さんは当時21歳で、後に甲可村(四條畷村の前身)村長を務めました。その記録『浸水日誌』は、迫真性の高い記述で、情報が錯綜する中、実際に洪水が広がるまでなかなか災害情報を信じることができない有り様など、当時の状況が克明に記録されています。

『浸水日誌』 本文冒頭

#### ■災害を後世に伝える ―『浸水日誌』から―

明治六年土月 記 查光傷 to 3 进 1 K 七 12 米 人民 1 \* 部

レ河州放日職長者江河内流河及口播 Ł 從無切上為上 货 4.0 11 成,籍 流出シナ A 記 得了大 大阪四盛、海上家屋 整湖 院 溢 5 

「精神」へ、対応、なる問題がない 1 論でも 大八五切り起し m 堤坊破 技 防衛一尽力 4 % 塚七家玉 在課題都得上因其一种十一日後一班車時在公大改衛 下一人 モラレ明 月 二十九 10年 17 暴爪 至一位中 ころ五茂 高り性も 10 . .

ANGA 無其子 異変之生八十首 見一心数十月 7 墺 福 想 天之為三人獨以免之可言 其 1 年六月 起くと ŧ

『浸水日誌』附言 山口米太郎著 明治18年

『浸水日誌』には、「附言」として、なぜこの記録を残すことにしたのか が記されています。上はその原文です。これによれば、まず「櫛※1 宍ニ 不時之災害ヲ起ス有リ 地ニ不定之異変之生スル有リ」として、台風や豪 雨など天候が関係して起きる災害と、地震など地盤に異変があって起きる 災害があることを述べています。そして、「天之為セル禍ハ免ル可カラズ てんそのひと れんぴん 天其人ヲ憐愍<sup>※4</sup>スルノ心無キ乎 将タ禍ヲ降シテ けいかん※3 ェのひと 「styling」 此人ヲ警戒ゼシメンガ為メナル乎 知ラズ」と、天災に対するやるせなさ を「天には人を憐れむ心はないのだろうか」と吐露しています。

そののち、「本年六月十七日非常ノ大洪水…」として、洪水の概要を述べ、 「数十萬ノ人民其害ヲ被ル 実ニ酷シ」と伝えています。その後「余等此変 コト齏リ´´´´ヾ<sup>\*7</sup>」と結んでいます。大変な災害に遭ったことから、「後の記 憶と為す」ため、この『浸水日誌』を執筆したのです。日常生活を続けて いると私たちはともすると災害が起こり得ることをしばしば忘れがちです が、このような記録が残されたからこそ、そこから教訓を得て、将来の災 害にあらかじめ備えることができるといえるでしょう。

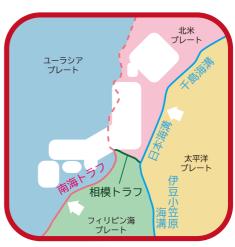
※1、抑:説き起こす時に使う語 ※2、宜なる哉:もっともなことだ ※3、頃間:このごろ ※4、憐愍:かわ いそうに思うこと ※5、聊か:少し ※6、縷述:事細かに述べること ※7、爾リ矣:その通りである

# \* ■ \* 2.残された地震の記録

#### ■日本の地震と地震の種類

日本は地震の多い国と言われています。世界的にみると震度6以上の地震の1割程度が日本付近で発生しています(2012~2021年調べ)。なぜこのように多くの地震が日本付近で発生するのでしょうか。

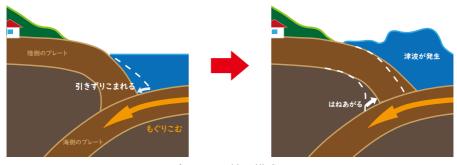
その原因は日本の立地です。日本は4つのプレート(地球を覆う岩盤)の境界上にあります。多くの地震は異なるプレートの境界で発生するため、地震が多くなります(右図)。



日本周辺のプレート

#### ・プレートによって起きる地震

日本周辺のプレートは海側のプレートが陸側のプレートの下に年間数cm から10cmほど潜り込んでいます (上図矢印の方向)。その際に引きずり込まれた陸側のプレートが耐え切れず跳ね上がることによって発生するのがプレートによっておきる地震です (下図)。



プレート間地震模式図

6 ベージから15ページ 字佐美龍夫2009「古地震の震度と計測震度との対応について」『わが国の歴史地震の震度分布・等震度線図(改訂版)』(社)日本電気協会。岡田義光 2019『決定新版 日本の地震地図』東京書籍。気象庁2022『令和4年(2022年)の地震活動について』。黒田丈二2011『知ろう! 防ごう! 自然災害① 地震・津波・火山噴火』岩崎書店。国土交通省国土地理院IP『活断層とは何か?』。水管理・国土保全局2022『河川データブック2022』。内閣府IP『特 集 地震を知って地震に備える』『中部圏・近畿圏の内陸地震に係る被害想定結果について(基本被害)』。山口育孝2017『稲むらの火のひみつー11月5 日は「世界津波の日」』学研プラス。

#### ・活断層による地震

岩盤にプレートの移動による 圧力が加わりズレ(断層)が生 じます。その断層のうち約200 万年前から現在までに動き、か つ今後も動くことが予想されて いるものを活断層といいます。 活断層が上下左右にずれること で発生する揺れが活断層による 地震となります。



活断層による地震模式図 ずれ方は圧力の方向などにより異なる

### ■地震の規模を知る

地震の大きさを表す言葉に震度とマグニチュード(M)があります。

震度は地震の揺れの大きさのことです。現在は10段階あり、一番大きな揺れは震度7です。日本で震度7が記録されたのは6回で、その中には兵庫県南部地震(阪神・淡路大震災:17分も参照)や東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)などが含まれます。

マグニチュードは地震の規模のことです。マグニチュードが大きいほど 規模が大きな地震であり、遠くまで揺れが広がります。しかし、マグニ チュードが小さいからと言って揺れが小さくなるわけでなく、震源が近け れば小さなマグニチュードでも大きな揺れが発生する可能性があります。

地震は一定の間隔で繰り返し起きます。プレートによる地震は数十年から数百年、活断層による地震は数千年単位の間隔で発生しています。そのため、過去の地震の規模や被害の状況を知ることは、いずれ起こる地震を知り対策する手がかりとなります。

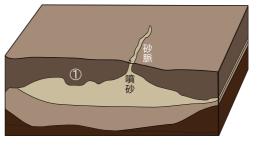
過去の地震を知るため、人の体感や建造物、河川の被害状況が書かれた 歴史史料から揺れの程度を推測する研究が行われました。今回の展示で記 載している江戸時代以前の地震の規模はこの研究の結果を参考としていま す。

#### ■四條畷でみつかった南海地震の痕跡(雁屋遺跡)



雁屋遺跡でみつかった噴砂の痕跡 大阪府教育委員会提供

平成4年(1992)から平成5年に大阪府立四條畷高等学校体育館の新築に伴い、罹屋遺跡の発掘調査がおこなわれました。弥生時代中期~後期のムラの跡などと共に資砂のあとがみつかりました。



噴砂とは地震により起こった

液状化の痕跡です。大きな地震が起こると、砂の地盤は地下水と砂が分離し、水が吹き上がり地盤が液体のようになります。このとき、地表に砂が混じった水が吹き上がったものを噴砂といいます。この痕跡が残っているということは、この場所で強い揺れが発生したことを意味します。

雁屋遺跡の噴砂は弥生時代後期後半(約1800年前)の層(図の①)を突き抜けています。このことから、噴砂の原因となった地震は弥生時代後期後半以降に起こった地震で、可能性としては南海地震が考えられるそうです。





#### 南海地震と世界津波の日

南海地震は南海トラフ(トラフ:海底の細長い谷)が震源であり、プレートが跳ね上がることにより起こる地震で、おおよそ100~150年周期で発生しています。近い将来再び起こる可能性が高い地震です。

江戸時代終わり頃の安政元年(1854)11月4日に安政東海地震(M8.4)が、翌11月5日には安政南海地震(M8.4)が起き、大きな被害が出ました。現大阪市では1.9mの津波が襲来し、約7000人の死者が出たといいます。また、

現和歌山県の広川町では数mの津波が村を襲いました。なんとか高台に逃げた庄屋の濱口梧陵が逃げ遅れた村人たちのため、高台に続く道の稲束に火をつけ目印とすることで、多くの人が助かりました。このできごとは、小学校の教科書に『稲むらの火』として掲載され、防災の教訓になっています。

平成23年(2015)には国連で津波についての会議が行われ、この安政南海地震が起きた11月5日を「世界津波の日」と制定しました。

南海・東南海・東海地震年表								
年	地震							
684	白鳳地震							
887	仁和地震							
1096 1099	永長東海地震 康和南海地震							
1361	正平東海地震 正平南海地震							
1498	明応地震							
1605	慶長地震							
1707	宝永地震							
1854	安政東海地震 安政南海地震							
1944 1946	昭和東南海地震 昭和南海地震							

#### ■四條畷と生駒断層(城遺跡)



生駒断層を発見したようす

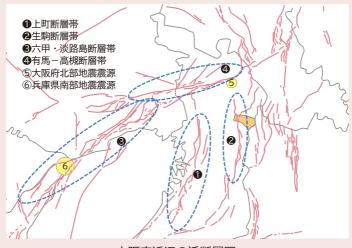
兵庫県南部地震(阪神・淡路大震災:17学も参照)をうけ、通商産業省工業技術院地質調査所(当時)が全国の主要活断層の活動履歴調査を行いました。調査の対象となった活断層の中には生駒山地と大阪平野との境界にある生駒断層帯が含まれ、四條畷市内の城遺跡でも平成8年(1996)に調査が行われました。



生駒断層の上からみつかった 奈良時代の須恵器 奈良文化財研究所撮影

城遺跡は古墳時代から中世に至る複合遺跡です。調査の結果、地下2mで幅3cm、長さ2.4m、傾斜角度11.5度で西側方向に立ち上がる断層が発見されました。断層が活動した後に削られて、そこへ土が溜まったところから奈良時代の須恵器の坏がみつかりました。さらに、その下の層から見つかった炭化物などに科学的な分析を行った結果、おおよそ2000年前の年代を示しました。このことから、この断層が前回動いたのは約2000年前より新しく、奈良時代より古い時代ということがわかりました。

#### 大阪周辺の活断層



大阪府近辺の活断層図

赤い線が活断層 青い点線で囲まれたところが断層帯 「活断層データベース」(産総研地質調査総合センター) (https://gbank.gsj.jp/activefault/search) を参考に作成

近畿地方は、中部地方や北陸地方と並んで日本でもっとも活断層が分布しています。さらに、敦賀湾から淡路島、伊勢湾を結ぶ三角形の地域は「近畿三角地帯」と呼ばれ、特に活断層が密集している地域です。

国は日本全国の主な活断層を調べ、地震の発生確率を出しています。大阪府にある上町断層帯と奈良県にある奈良盆地東縁断層帯は日本の主な活断層の中でも地震の発生確率が高いとされています。上町断層帯は30年以内に2~3%の確率で地震が起こり、規模はM7.5程度と予想されています。近畿地方の地震の中で最も被害が大きく出る地震と考えられ、火災による建物被害や多数の死者数が出るとされています。一方、城遺跡でみつかった断層を含む生駒断層帯は30年以内にほぼ0~0.2%の確率で地震が起こり、規模はM7.0~7.5程度、被害は上町断層帯の次に大きいと予想されています。

1年間で交通事故に遭う確率は約0.2%と言われています。それと同等あるいは10倍の確率で大きな地震が起こると思うと現実味を帯びてきませんか?

#### ■慶長伏見地震の痕跡①(西三荘遺跡)

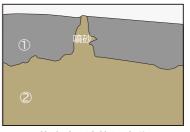
平成元年(1989)、門真市にある西兰荘遺跡で発掘調査が行われました。 その時、液状化の痕跡がみつかりました。粘土と微細な砂が交互になっている層(図の①)は淀川の自然堤防をつくる層で、砂の層(図の②)は淀川が運んだ砂や小石の層です。②の砂が上の①を突き抜けています(噴砂)。

①の層からは室町時代(一番新しいものは15世紀)の土器などがみつかっており、さらにその上の層からは江戸時代(18世紀)の陶磁器などがみつかっています。このことから、この液状化の跡ができる原因となった地震は室町時代より新しく、江戸時代より古いということがわかります。

その頃に起きた地震で、この地域に液状化を起こすような地震は摂津河南地震(1510年)、慶長伏見地震(1596年)、琵琶湖西岸地震(1662年)の3つが挙げられます。その中でも西三荘遺跡周辺に強い揺れが起きたと確実に分かる地震は慶長伏見地震であるため、この地震が原因で液状化が起き、噴砂ができたと考えられます。



西三荘遺跡 液状化跡 門真市立歴史資料館提供



西三荘遺跡 液状化跡説明図



西三荘遺跡出土土師皿 門真市立歴史資料館蔵 ①の層からみつかった土師器

#### 秀吉とナマズと慶長伏見地震

文禄5年閏7月13日 (1596年9月5日) 午前0時頃、おおよそM7.5、最大 震度6とみられる地震が起き、当時の都である京都から淡路島のあたりまで が激しく揺れました。この地震を慶長伏見地震といいます。

この慶長伏見地震は有力 高槻断層帯や六甲断層帯が動いたことが原因で起きました。京都の東寺や大覚寺が倒壊し、大坂や堺では町屋が崩れ、兵庫では倒れた家が火事にあうなど多くの被害が出ました。

災害は誰の元にも訪れるもの。時の権力者であった豊臣秀吉も例外なくこの地震によって被災しました。京都の伏見、指昇にあった伏見城が倒壊し、その城内にいた秀吉は妻の淀殿や息子の秀頼と命からがら庭に逃げ出しました。城内では天守閣の上部や二の丸が崩れ数百人の女中が亡くなりました。

実は秀吉は天正14年(1586)にも琵琶湖の南西にある坂本城で天正地震に遭いました。あまりにも大きな揺れに、秀吉は大坂城に逃げ帰ったそうです。7年後、伏見城の建設の際に出した手紙には「ふしきのふしん(普請)なまつ(ナマズ)大事にて…」と書かれており、伏見城の築城は地震に備えることが大事であるといった内容で、地震をナマズと言い換えています。これが地震をナマズと表現したものの初出です。琵琶湖で地震に遭った秀吉は、琵琶湖のナマズが大きな地震を引き起こしたと思ったのかもしれません。江戸時代にはナマズ=地震が根付いていたようで、大きな地震の後にはナマズの絵が出回りました。

2度も大きな地震を経験した秀吉は、慶長伏見地震の翌日から築城に着工し、木幡山に木幡山伏見城を作りました。城が地震で倒壊したことを考慮し、石垣や天守閣の構造を変え、地震に強い城を作りました。

# ■慶長伏見地震の痕跡②(有池遺跡)



有池遺跡でみつかった砂脈 交野市教育委員会提供

平成12年(2000)、交野市の有池遺跡で発掘調査が行われ、液状化の痕跡である砂脈がみつかりました。砂脈とは噴砂の通り道であり、砂が詰まった割れ目のことです。砂脈は最大幅80cm、長さ7m以上にも及びました。

砂脈は鎌倉時代の土器を含む層や、室町時代に相当する層を引き裂いており、その上に江戸時代の層が堆積していました。室町時代から江戸時代の間に起き、液状化が起きるほどの揺れを引き起こした地震ということから、慶長伏見地震が原因で起きた液状化の跡だと推定されています。

噴砂の中からみつかった瓦器碗 (13世紀中頃) 交野市教育委員会蔵 噴砂に鉄分が含まれていたせいか、土 器にも赤い砂が付着し変色している



砂脈は長さ7m以上に及んだ 交野市教育委員会提供



#### ■慶長伏見地震の痕跡③(今城塚古墳)

高槻市にある今城塚古墳は、 第26代天皇である継体天皇が埋葬された陵墓と考えられています。

西向きの墳丘には2重の濠が 巡っており、墳長181mを有し、 淀川流域では有数の規模の前方 後円墳です。調査や整備のため 発掘調査が複数回にわたって行 われています。その調査の中で 地震の痕跡がみつかりました。

右の写真中段は墳丘が地すべりを起こしています。この地すべりの下からはヒシの種が見つかっており、その種を科学分析にかけ年代を測定した結果1500年ごろを指し示すことから、地すべりの原因は慶長伏見地震であると推定されています。

慶長伏見地震の原因となった 断層である有馬-高槻断層帯の 中に安威断層があります。安威 断層は東西に延びており、東端 を東に伸ばすと今城塚古墳の真 下に当たります。そのため、他 地域より揺れが強く、墳丘や石 室などが崩れたと考えられます。



**今城塚古墳全景** 高槻市立今城塚古代歴史館提供



墳丘の地すべり跡 高槻市立今城塚古代歴史館提供



地震により崩壊した石室 高槻市立今城塚古代歴史館提供

# ■100年前の大災害 関東大震災 大正12年(1923)9月1日



関東大震災直後の東京・京橋から日本橋方面の様子 大正12年9月 四條畷市教育委員会蔵\*

今からちょうど百年前、関東地方を襲った関東大震災は、37万2659棟の住宅が全半壊し、死者・行方不明者10万5385人に達しており、我が国の歴史上最悪の自然災害と言われます。東京での火災被害が著しく、旧陸軍被服廠跡では短時間で約3万8000人が亡くなりましたが、震源の相模湾に近い神奈川県域の方がむしろ揺れは酷く、土砂崩れが多数発生し、伊豆半島などには最大12mの津波も押し寄せました。

四條畷市教育委員会では、市民から寄贈 を受けた関東大震災の記録写真を保管して います。



上野公園・西郷隆盛像\* 安否確認の紙が多数貼られている

### ■阪神・淡路大震災 平成7年(1995) 1月17日



芦屋市へ派遣された給水タンク車 平成7年1月

平成7年(1995) 1月17日午前5時46分に起こった淡路島北部を震源とする最大震度7の兵庫県南部地震は、死者6434人、負傷者4万人以上の大惨事となり、阪神・淡路大震災と呼ばれます。人々がまだ眠っている時間帯で、突然の揺れにとっさに家族に覆いかぶさり庇ったといいます。府下は震度4



物資を満載して 神戸方面へ出発するトラック

とされましたが、実際は市域でも震度5を観測し(鄯屋新町)、家屋の壁が落ちるなど157棟に被害がありました。被害の甚大な神戸方面へ消防団の選抜隊と消防本部の救急応援隊が1月19日に派遣され、懸命な救助活動を行いました。給水タンク車派遣や緊急物資輸送も行われ、飯盛霊園では亡くなった多くの人を受け入れ24時間体制で火葬を行ったといいます。

# 3. 記録された水害・洪水

# ■古墳時代の水害・讃良郡条里遺跡 5~6世紀



水路の堤防が決壊する水害により 砂に覆われていた田んぼ 古墳時代後期(6世紀)



堤防が決壊した箇所 堤防が決壊して流れ込んだ 砂が堆積している

イオンモール四條畷の建設に伴う発掘調査で、古墳時代後期(6世紀)に洪水の被害を受けた田んぼ(水田)がみつかりました。この田んぼは洪水によって運ばれた砂にパックされており、古墳時代後期のおよそ百年間だけで最低でも四回の洪水に襲われた跡がありました。人々はそのたびに田んぼ



何度も堤防が決壊し修復が繰り返された水路 古墳時代後期(6世紀)

の土を入れなおし、再び米作 りをおこなっていたようです。

田んぼに水をひくための水 路は、幅がおよそ4mあり、 両側に堤防を設けていまし た。堤防は洪水により何度も 決壊し、そのたびに土を入れ なおして堤防を補修していた ことがわかりました。堤防の 両側を杭で囲い、そこに木材



堤防修復の際に敷かれた枝葉 古墳時代後期(6世紀)

を添えることで堤防が切れにくくなるように強化されていました。また、 堤防の構築や補修には、木の枝葉を敷いて地盤を固める工法が使われてい ました。古墳時代の人たちが、生きていくために技術を結集させて洪水と 戦いながら懸命に農業をおこなっていたことがわかります。

# ■江戸時代の豪雨災害 天明6年(1786)6月13日



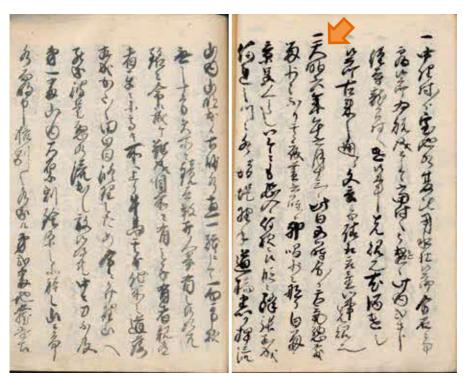
現在の権現川



豪雨が記録された文書 『御役所録』南野養水文書

天明6年6月13日(1786年7月8日)、 午後6時ごろから降り出した雷鳴を伴う豪 雨のため、一気に権現川が増水し、堤や野 道、橋を押し流し、山沿いが崩れるという 災害が起きました。土砂と水が一体で押し 寄せてきたといいます。

人々は子どもや高齢者を高所に避難させ、道路も断ち切られる中、田畑修理のため命がけで流れてきた水を放流しました。しかし、「土砂水」にはあらがいきれず、谷が崩れたり権現川がせき止められたりなど大きな被害が出ました。



天明6年6月13日の豪雨の記録(冒頭部分) 矢印箇所から豪雨のことが記録されている 『御役所録』南野養水文書より

災害状況は順を追って詳細に記録されており、それによれば、最初に飯盛山北東の山地が水で覆われ、次にその付近の谷が崩れ出しました。続けて飯盛山北原で水車稼ぎの家が土砂崩れで崩壊したうえ権現川がせき止められました。その後は南野村と中野村で立ち会っていた分水のための石造物などがすべて流失し、続けて滝村で個人宅の水車場・土蔵・石垣が流失し、畑村の弥勒寺では石垣が崩壊流失しました。さらに畑村で複数の個人宅地の流失が続き、畑村から中津川村まで井路道橋ことごとく流失し、ついに川崎池では最悪の事態を防ぐため南堤を切り落とす事態におちいり、東高野街道筋が60間(約109m)通行不能となりました。南野村では、中津川村の21歳の男性が水死したのに加えて2人がなくなり、亡骸は南野村に隣接する北条村(現大東市)西の切れ所(堤防決壊箇所)に流れ込み、もらい受けて葬ったといいます。

# ■明治18年淀川洪水 明治18年(1885)6~7月



枚方・伊加賀の洪水の様子 明治18年6月下旬 大阪歴史博物館提供



枚方・伊加賀での堤防復旧工事 明治18年6月下旬 大阪歴史博物館提供

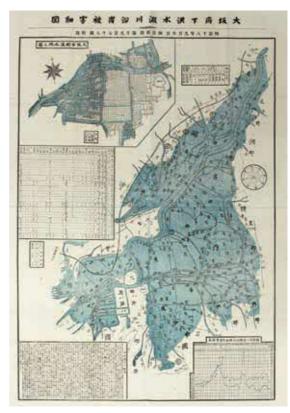


洪水で流された天満橋 明治18年7月上旬 国土交通省淀川河川事務所提供

明治18年(1885)、大雨が降り続く中6月17日に枚方の伊加賀で淀川が 決壊、修復中7月2日に再決壊したのをはじめ、氾濫、堤防決壊多数により 讃食郡、茨田郡から大阪市内まで河内平野一帯を大洪水が襲いました。 最初に堤防が決壊した箇所から「伊加賀切れ」と呼ばれます。

先に紹介した『浸水日誌』(4分) によれば、当初は決壊が本当のことと信じられなかったといいます。村役場からの使いが走り告げるのを聞いて初めて信じ、門真の親戚にも伝えますが信じてもらえず、水が来て初めて

しゅうしょうろうばい 周章狼狽する有様でした。 6月29日に至り大雨で蔀 を 屋も浸水、清滝川、岡部 川が氾濫し、砂、岡山で も出水、危険な状況にな ります。7月1日には大 暴風雨で午後5時頃本泉 寺の警鐘が非常を報じま した。4日にようやく水 が引き始め、一週間ほど かかりました。被災者は 家を失い慟哭し、幼児は 親を尋ねて号叫彷徨い、 親は子を捜索して狂奔 し、筆舌に尽くしがたい 惨酷さだったといいます。



大坂府下洪水澱川沿岸被害細図 明治18年9月20日 朝日新聞第1978号附録 個人蔵・四條畷市教育委員会寄託



大橋房太郎を顕彰する石碑 四條畷神社境内 左:大橋房太郎君紀功碑・大正12年6月 右:治水翁碑・大正12年8月



# 4. 写真記録でみる台風被害



# ■室戸台風 昭和9年(1934)9月21日



室戸台風で倒壊した旧制大阪府立四條畷中学校講堂 大阪府立四條畷中学校昭和10年3月卒業アルバムより



被害を受けたプール付近の施設 大阪府立四條畷高等学校提供



生徒による復旧作業 昭和10年3月卒業アルバムより

昭和9年(1934) 9月21日、日本列島に上陸した室戸台風は、上陸時の中心気圧911.6以(hPa)、最大瞬間風速60m以上(機械が故障しこれ以上計測できなかった)という記録的な規模・勢力で、各地で甚大な被害をも



室戸台風の被害を知らせる新聞 昭和9年9月22日付 個人蔵・四條畷市教育委員会寄託

たらし、四條畷村域で全壊111をはじめ計1293棟、田原村域で全壊3棟など大きな被害がありました。

この日は金曜日で子どもたちは通常通り学校に登校しました。四條畷小学校では長い校舎が蛇のように揺れ動き、屋根瓦計14700枚が木の葉のように飛び散り恐ろしさで声も出ず正門付近で震えていたといいます。田原小学校では校舎内で危険を感じ運動場中央に避難し、倒れた大木の陰でうずくまり職員4人は児童を取り囲みました。天野川対岸で北倭第四小学校舎が倒壊するのが見える中、先生たちは児童を必死で励ましながら人的被害なく守り抜いたといいます。府立四條畷中学校では補習授業中だった講堂が倒壊、ミリミリと音をたてる天井に先生が慌てて生徒を連れ出した直後のことでした。生徒たちは生きた心地がせず、神仏に祈願したり、漢詩を詠じたり、今生の別れと合唱したりするなど悲壮を極めました。

# ■新発見の室戸台風災害写真





新たにみつかった忍陵神社の室戸台風被害写真 社殿の屋根が吹き飛んでいる 昭和9年9月



新たにみつかった忍陵神社の室戸台風被害写真と台紙 倒木で石燈篭が破壊されている 昭和9年9月

室戸台風では、現四條畷市域の神社にも大きな被害がありました。四條 畷神社では絵馬殿が全壊し、石垣や玉垣も一部倒壊したうえ、境内の松や 杉など234本が倒折する被害があり、國中神社でも松など90本の被害に加 え、境内社や鳥居が全半壊しました。

市域の神社で特に甚大な被害を受けたのは忍陵神社で、本殿が全壊し、翌年に社殿の新築に伴い忍岡古墳の石室(石槨)が発見される契機となりました。このことについて、これまで「室戸台風で社殿が倒壊した」との記録や言い伝えは残っていましたが、詳しい被害の様子は知られていませんでした。しかし、今年(令和5年)新たに市民から寄贈を受けた資料の中に神社が災害被害を受けている写真が3点みつかり、写っている周辺の風景や、石燈篭の特徴から忍陵神社と判明し、過去の災害記録との対照と、写真台紙の様式から、昭和9年の室戸台風被害を写したものと確認しました。同社の詳しい被害の様子を写した写真を確認したのは初めてのことです。

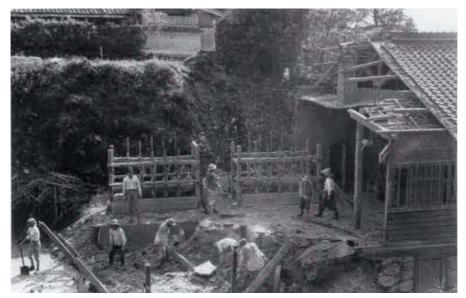
# ■昭和28年台風第13号 昭和28年(1953)9月25日



濁流となった権現川 橋の欄干が半分以上のまれている 昭和28年9月26日頃 小山幸太郎さん撮影 個人提供



大量の瓦礫で埋まった権現川 昭和28年9月26日頃 小山幸太郎さん撮影 個人提供



壊滅した権現川流域の水車小屋 基礎の地盤が破壊され、水車は完全に流失している 昭和28年9月26日頃 小山幸太郎さん撮影 個人提供



田原村の被害調査票綴り

昭和28年(1953) 9月25日に襲った台風第 13号では、四條畷市内に甚大な被害がありま した。当時の四條畷町では人口の三分の一を 超える3671人が被災し1人が亡くなり、全壊・ 流失36をはじめ708棟の建物被害、権現・清滝・ 岡部・讃良川が氾濫したうえ堤防決壊も12箇 所、国道大阪四日市線(現163号)が清滝で

450mにわたり崩土に覆われたのをはじめ道路被害42箇所、崖崩れ150箇所を数えました。田原村でも上田原天野川上流での土砂崩れに始まり、7棟の建物被害、上田原で府道住道郡山線が80m崩壊など50箇所の道路被害がありました。当時、現四條畷市内の権現川、清滝川の流域などでは、河川の水流を利用した水車による製粉業が栄えており、権現川流域に約20基、清滝川流域には約10基の水車がありましたが、この台風により市内の水車製粉業に壊滅的な打撃がありました。



昭和28年台風第13号の被害を伝える記念碑

特に権現川流域の被害状況は凄惨で、室池より低い位置に水車用水のため造られていた通称水車池が決壊し、山腹崩壊も著しく、川筋の家屋や水車群が倒壊・流失、その瓦礫がさらに氾濫を呼び、下流の川崎方面は水没、田畑も流失・埋没著しく、この世のものとは思えない状況だったといいます。現在権現川のほとりには、南野用水組合による記念碑が昭和45年に建てられ、被害を今に伝えています。その碑文は次の通りです。

「昭和二十八年九月二十五日此地方を襲いし台風十三号の未曽有の豪雨により各河川共に氾濫堪大なる被害をもたらせり 分ても権現川流域は東部山野の崩潰加わり家屋の流出埋没を初め想像を絶す被害を蒙りただ悲惨の一言に尽きる外なし 更に翌二十九年又しても大雨の追打に合い流域農業用施設は総て其機能を失い只茫然と見入るのみなり 其後町営局を初め関係機関の指導と援助もとに地区民一同挺身之が復旧に当る 概要は城金堂 木間 川崎の各池を初め幹線水路五ヶ所取水井堰五ヶ所に及び事業費総額壱千六萬円を要したり 今夏七月一日附を以て市制が施行され四條畷市が誕生せしを機に當時の危難を顧りみて茲に之を記す」



# 5. 現代の災害と防災



# 防災マップと現代の災害



四條畷市防災マップ

災害の威力は、科学が進ん だ現代でも過小評価すべきで はありません。平成30年台風 第21号(2018年9月4日)で は、大木が折れ、電飾看板が 火を噴きながら落下し、多く の地区で停電が起き、市域で 330棟の建物被害がありまし



平成30年台風第21号が襲う四條畷小学校

た。同年には大阪府北部地震も6月18日に発生しています。 防災マップなどを活用し、非常持ち出し品の準備や、家 具の転倒防止などの対策を行うなど、風水害や地震に日頃 から備えをしておくことが肝要でしょう。



